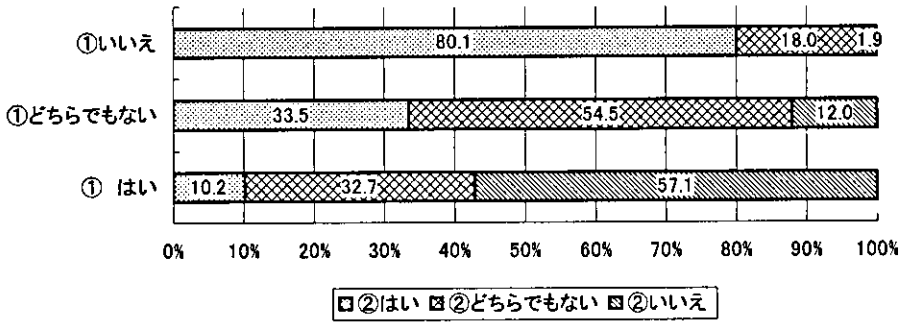
が顕著であることがわかった。逆に言うと、「子育てを一方の親に任せきりにしていない家庭の父親は、子育てに協力的である」と傾向がはっきりしていると言える。

「子どものことは一方の親が責任をとり、他方はまかせきりですか」(一方の親任せ)と「お父さんは子どもとよく遊びますか」クロス集計においても、図 C-10-3 と同様に明らかな傾向がみられた。すなわち、子育てが一方の親任せになっていない家庭では、父親が子どもとよく遊んでいるのである。

図 C-10-3 「①子どものことは一方の親が責任をとり、他方はまかせきりですか」と「②お父さんは育児に協力的ですか」とのクロス集計結果 (3 歳児健診)



C－10－6 母親が一人で子育てを担っていることが、母親の子どもと遊ぶ時間に与える影響

「大阪レポート」においては、子育てを「一方の親任せ」にされている母親は、子どもと遊ぶことが少ない傾向が見出されていた。今回の調査においては、「大阪レポート」の質問項目と選択肢を変更したため、前回の結果との比較は行えないが、以下今回の結果を述べる。

「子どものことは一方の親が責任をとり、他方は任せきりですか」(一方の親任せ)と「お母さんが子どもと遊ぶ時間」のクロス集計を行った。遊ぶ時間は一日の平均的な時間を想定し、「ほとんどない」、「30 分くらい」、「1 時間くらい」、「2 時間以上」で選択してもらった。その結果、子育てが「一方の親任せになっている」群と「どちらでもない」群、「一方の親任せになっていない」群の 3 群間における、母親が子どもと遊ぶ時間の有意差は認めなれなかった。すなわち、現在では子育てが「一方の親任せ」になっていることは、母親が子どもと遊ぶ時間にあまり影響を与えていないと考えられた。

C－10－7 母親が一人で子育てを担っていることが、母親の育児における「イライラ」に与える影響

育児が一方の親任せになっている場合は、母親の育児における精神的ストレスがつのっていることは、前回の調査では実証されていた。しかし、今回の結果では、「一方の親任せ」になっている状況と、母親の育児における精神的ストレスの関係は実証されなかった。

今回の調査においても、前回調査と同様の傾向が見られるか検証するため、同じ質

問項目を設定しクロス集計を行った。しかし、今回調査においては、子育てに夫婦で取り組んでいる状況においても、「一方の親任せ」の場合と同様に母親のイライラは生じていた。「子育てでイライラすることはありますか」の各群の「はい」の選択率は、「一方の親任せになっている」群 51.9%、「どちらでもない」群 53.8%、「一方の親任せになっていない」群 44.9%となっており、3 群間に有意な差はなかった。

C－10－8　「子育てできる環境」を父親に！

今回の調査結果においては、20 年前の「大阪レポート」と比較して父親は子育てに協力的であり、子どもと良く遊び、夫婦で子育てについて話合っている姿が窺えた。一方で、20 年前と比較して子育てで父親をたよりにする母親は、子どもが 1 歳 6 か月や 3 歳の時点では減っている。また、子育てが母親に任せられる傾向にあるか否かに関わらず、「子育てでイライラする」という母親は増加している。

この 20 年間、国、地方自治体、その他地域などで子育て支援に取り組み、その基盤を整備してきたことは多くの子育て支援メニューの具体化により確認されるところである。また子育てに夫婦で取り組むという意識の高揚は、子育てに協力的な父親や子どもとよく遊ぶ父親、そして子育てについて話し合う夫婦の増加という結果に現れている。しかしそれが真に母親の育児の支えになっていないことが、子育てが母親任せになっているか否かに関わらず、「イライラ」する母親が増加していることや、子育てにおいて父親を頼りにする人が増加していない結果から推察される。

これはどういうことであろうか。母親は、父親が「育児に協力的」であり、「子どもともよく遊んでくれる」と感じている。にもかかわらず、母親の「いらいら」は解消されていない。“Nobody's Perfect”プログラムを実施している中で、「日常のイライラ」をテーマにしたことがある。「何がおこっているのだろうか」「何にイライラしているのだろうか」と母親同士で話をしてもらうのである。毎週１回（１回２時間）全８回のプログラムであるが、回も重ねてくると母親たち同士の話し合いも盛り上がる。このようなテーマを取り上げられるのは、５～６回目である。母親たちのあるグループでは、「子どものことでイライラばかりしていると思っていたけど、ほんとうは夫がいらいらの原因だったかも‥‥」という結論を出した。「夫はいつも早くから遅くまで働いて、くたくたになっている。そんな中で、よく子どもの相手をしてくれていると思うわ」というのが母親たちの共通の感想である。夫がくたくたになる程働かされて、夜も遅く帰って来るので、子どもの生活リズムも整えられない」と母親たちは訴える。父親がほんとうに育児に関われるような労働条件や物理的環境がないのである。そのような状況が本調査結果にあらわれているのではないだろうか。「子育てをしない男を父親とは呼ばない」というのもいいが、それだけでなく現実に「父親が子育てできる環境を整える」ことが必要ではないだろうか。そうしないと、ますます結婚に魅力を感じられない若者たちが増えるであろう。

C－11　現代母親の精神的ストレスの新たな原因
―　「自己実現」と「親役割」の狭間で悩む母親たち　―

本研究が明らかにした最も大きい点は、母親の精神的ストレスの原因が変わってき

ていることを解明した点ではないか、と考えている。このことについて本節では取り上げることにする。

C－11－1「自己実現」を目標に育てられてきた世代

以上述べてきたように今回の調査では、現代の子育て実態が２０数年前の状況と大きく変わってきていることが明らかになった。変わった点として、母親の精神的ストレスが非常に増大していることがあげられる。その原因としては、子育て中の「母子の孤立化」や育児に関する体験不足のため「親が子どもを知らないこと」、子育ての負担が母親のみにかかっていること、などがあげられる。これらのことは1980年の「大阪レポート」でも母親の精神的ストレスの原因としてあげられてきたものである。しかし、今回の調査では我々の想像を越えてさらに深刻化していることが判明した。一方、「大阪レポート」であげられた原因だけでは現代の母親の精神的ストレスは説明がつかないことも明らかになっている。そのことについて、ここでは検討をしたい。

今の世代は、男女ともに「いかに自分のしたいことを実現するか、自分の夢をかなえるか」「きっと自分のしたいことが見つかるはずだ。自分の能力を最大限活かして、他の人とはちがうあなただけの人生を生きなさい」、という「自己実現」を目標に育てられてきた世代である。ＮＨＫ朝の連続ドラマのどれを観ても「自己実現」がテーマである。ところが、現代日本の子育ては「自己実現」とは対極の「自己犠牲」という側面が強い世界である。育ってきた価値観とまったく逆なのである。そのあたりが現在日本において、子育てが非常にしんどくなり、かつ少子化が急速に進行する大きな要因の一つである。そのことが「兵庫レポート」では判明している。

C－11－2　他者からの評価が気になる現代の子育て世代

1950年代の子どものいる風景写真を集めた『雪国はなったらし風土記』[6]という写真集がある。この写真集の写真には、1歳過ぎの子をおんぶして子守りをしている５・６歳の幼児をはじめ、子どもたちが子守りをしている写真や、地域の子ども集団の中でイキイキと遊ぶ子どもたち、無くてはならない小さな労働力として家の手伝いをする子どもたちの姿が写されている。1950年代と言えば、つい５０年前にすぎない。にもかかわらず、日本社会の変貌の大きさを改めて認識させられる。この当時の子どもたちは親に育てられているというよりも地域の子ども集団の中で育っていることがよくわかる写真集である。大人はほとんど登場しないのである。現代の子育て環境が変わったことを理解する上で貴重な資料である。

この写真集に登場する子どもたちが初代専業主婦のおわり頃の世代（現在、６０歳代の世代）である。この世代は、幼少期には同世代の子ども集団の中で育ち、自分の弟や妹などの子守りも当たり前のようにしてきた世代である。そのため、都会に出てきて、専業主婦になっても、家事にはたけているし、子育てに戸惑うことはなかったのである。ところが今の子育て世代は、同じ専業主婦と言われても、初代専業主婦とはまったく生育環境のちがう中で育った世代である。専業主婦に育てられた世代であり、つねに親や大人の視線の中で育った世代である。そのためか、親や先生など他者からの評価がすごく気になるのである。図C-11-1に「他の人があなたの育児をほめた

り批判したりするのは気になりますか」という質問結果を示している。図からわかるように、４０％前後の母親がはっきりと「他の人の評価が気になる」と答えている。逆に「気にならない」は、１５％前後と少ない。

図 C-11-1　「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」（兵庫、2003 年）

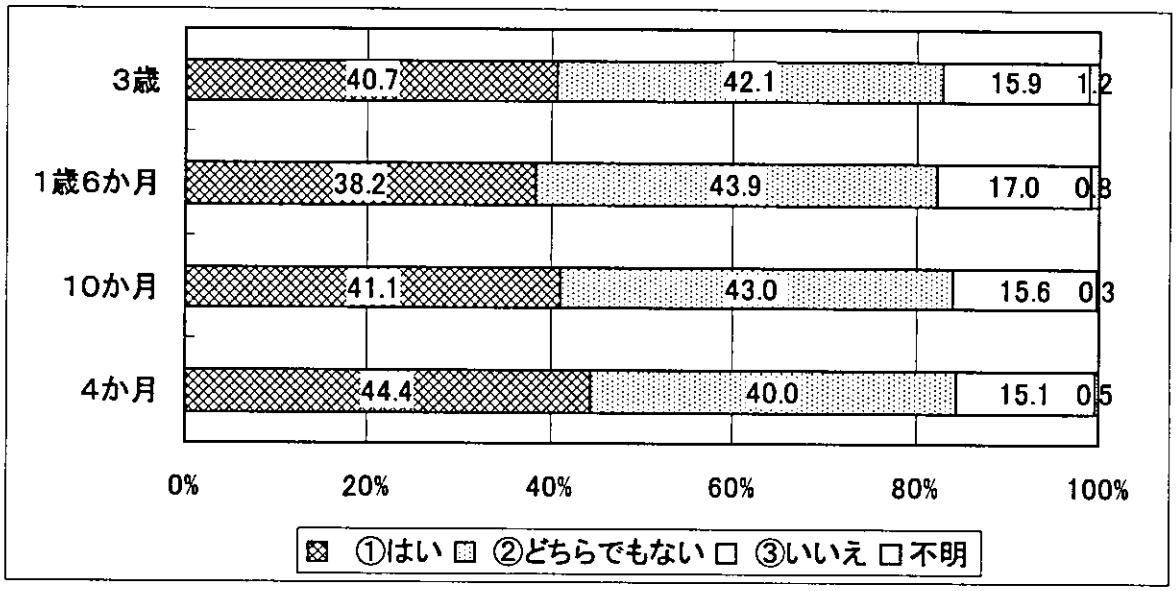


図 C-11-2 に「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」という質問結果を示している。半数近くの母親が「はい」と答え、自分の子育ての努力を「ほめて欲しい」とはっきりと訴えている。一方、「いいえ」は６人に１人程度と少ない。

図 C-11-2　あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか。

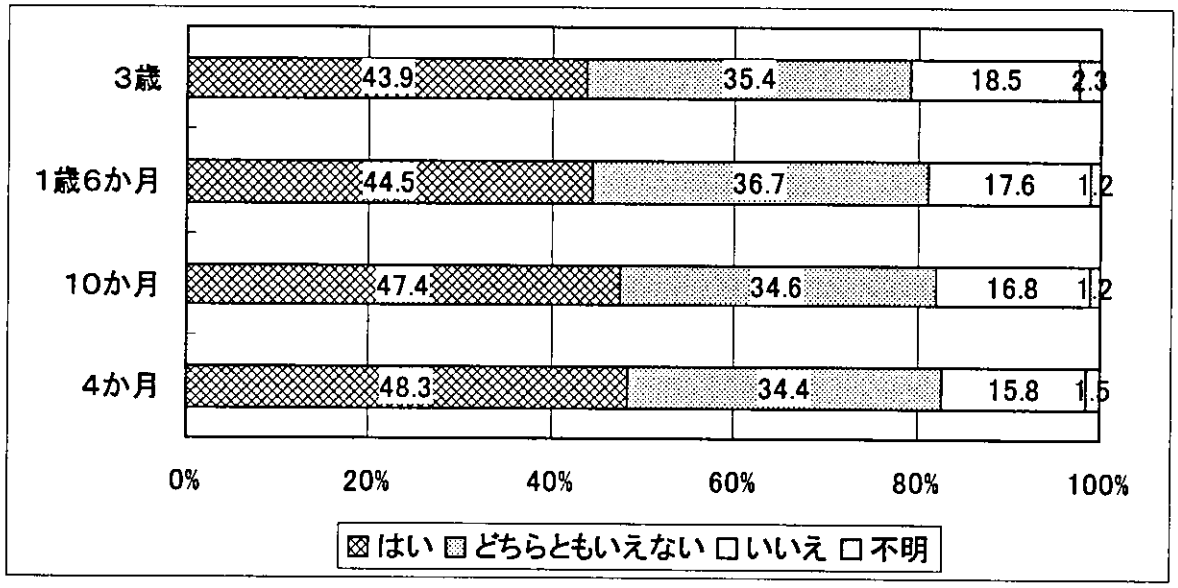


図 C-11-3 に、「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」という質問と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果を示す。図からわかるように、他の人の評価が気になる人ほど、「ほめて欲しい」という欲求が強いことがわかる。

しかし現実には、母親なんだから、「子育てして当たり前」という感覚は根強いものがある。特に専業主婦の場合、「一日中家にいて、子どもの相手をしてるだけなのだから、楽だろう、暇だろう」と思われがちである。そのため、四六時中休みなく子どもの世話をしていても誰からも褒められないのである。このような事態は今の子育て世代には耐え難いことにちがいない。事実、多くの母親たちが「褒められたい！」と訴えている。

「褒められたい」のは、専業主婦に限ったことでは当然ない。子育て中の母親は、誰でもみんな自分がこんなに子育てで頑張っていることを、褒めて欲しいのである。図 C-11-4 に「お母さんは現在仕事をしていますか」と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（１歳６カ月児健診）を示している。「ほめて欲しい」は、専業主婦が４８．８％、仕事をしている母親が 39.6％と、専業主婦の方が「褒めてほしい」母親が多くなっているが、大した差ではない。ところが、働いている母親は褒めてもらえる機会がない訳ではない。そのため、専業主婦の「ほめて欲しい」という欲求は、より切実なものではないだろうか。

図C-11-3 「他の人があなたの育児をほめたり批判したりするのは気になりますか」という質問と「あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（兵庫、１歳６か月児健診）

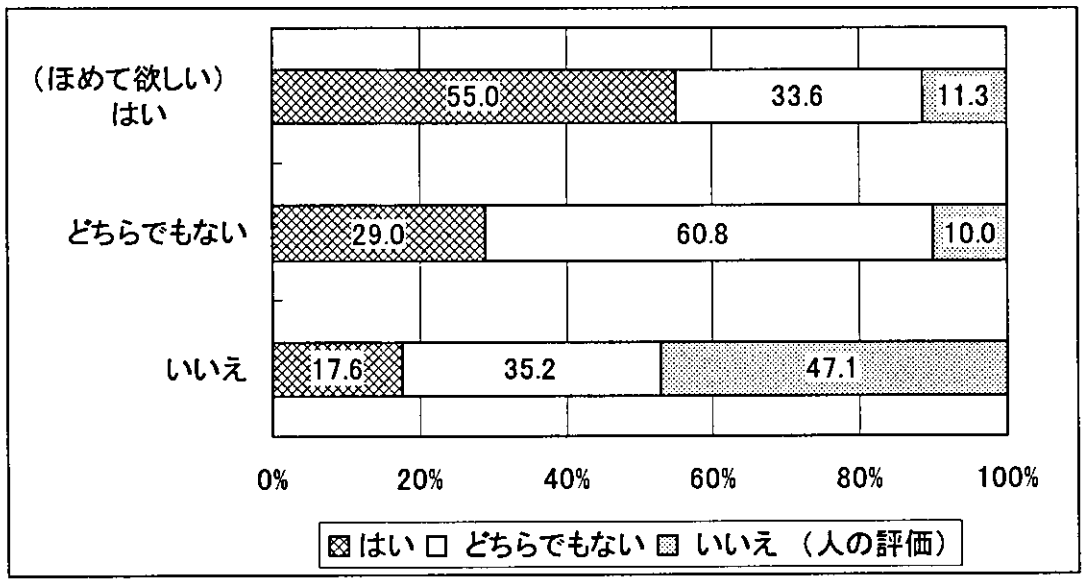
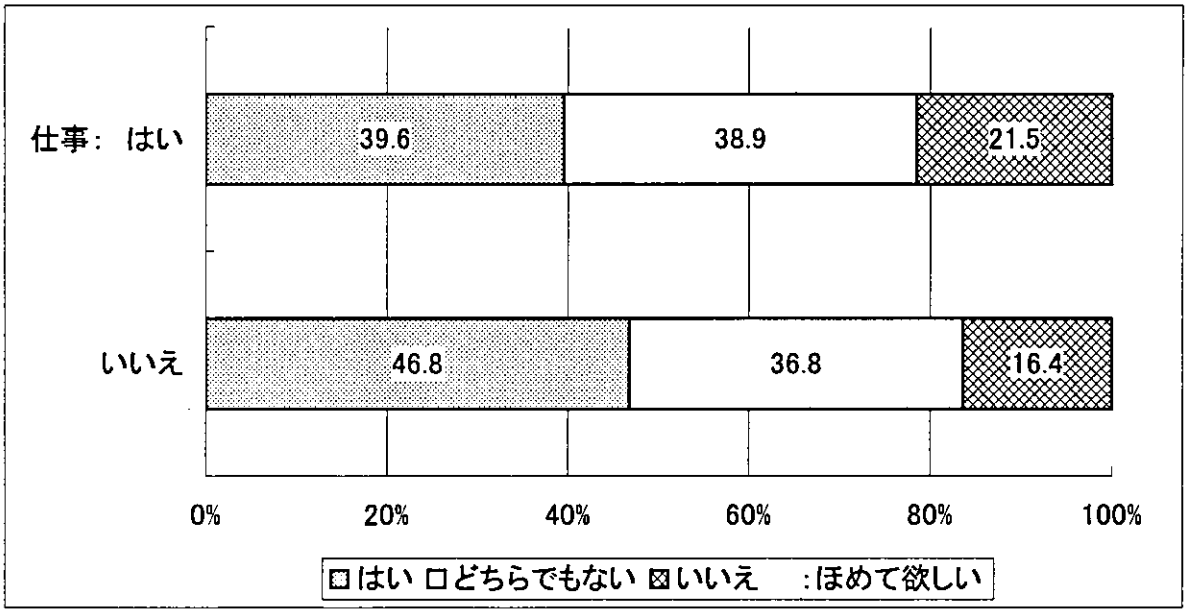


図 C-11-4「お母さんは現在仕事をしていますか」と「ほめて欲しいと思うことがありますか」とのクロス集計結果（兵庫、1歳6カ月児健診）



C－11－3　親たちの心の発達課題
― 「自己実現」と「親の役割」とのバランスをいかに取るか ―

子育てをしながら仕事をされている母親は、肉体的にも精神的にもたいへんである。仕事をされている親に対する子育て支援は、当然であり、多くの方が理解しやすいものである。しかし、現代の特徴は在宅で子育てをしている母親の方がより危機的状況を抱えていることである。それはなぜか。

今の世代は「自己実現」をテーマに育てられてきた経過がある。結婚するまで、子どもが生まれるまでは自分の好きなように時間を使ってきた世代である。ところが、赤ちゃんが生まれた途端、自分の時間がまったくなくなってしまう。６０歳くらい以上の世代であれば、小さいときから家に帰えれば農作業など家の仕事が待っていた。自分がしたいと思うことを押さえて、家の手伝いもしてきた。人間にとって経験ほどたいせつなものはない。初代専業主婦と現代の母親たちとの生育歴での体験の違いは、その中ではぐくまれた価値観や思考、感覚などに大きな変貌をもたらしている。

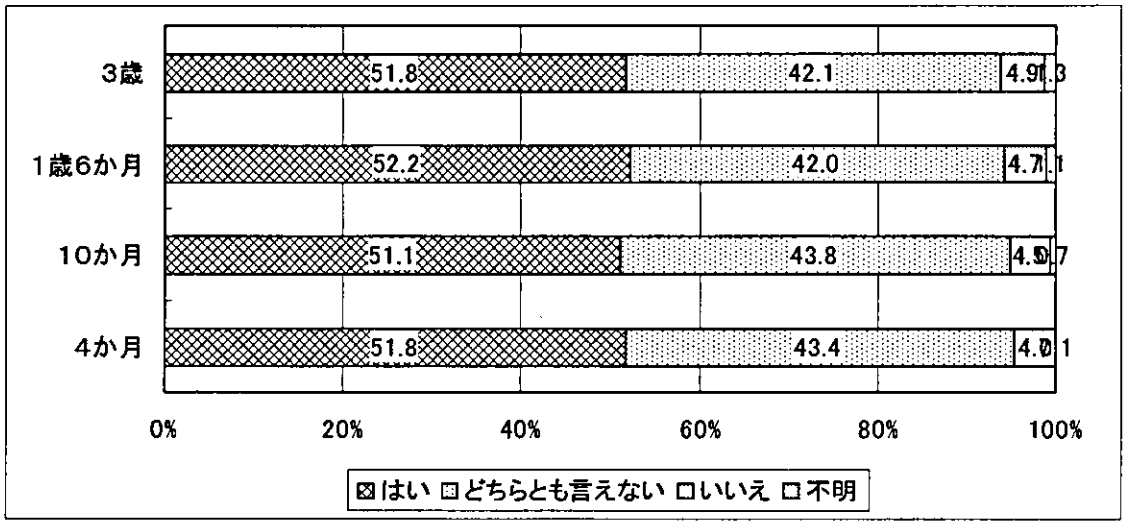
現代の母親にとっては、四六時中自分を拘束され、したいことが何もできないという体験は初めての体験である。かつて経験したことのない体験がどれほど精神的ストレスの高いものであるか、は想像に難くない。というより、６０歳前後の世代の想像をはるかに超えているのである。子育ては「自己実現」とは対極の「自己犠牲」の世界という面が歴然とある。

図 C-11-5 に「あなたは、自分の思い通りにものごとをすすめたい方ですか」という質問の結果を示す。本項の質問のすべてが「大阪レポート」にはなかった質問のため、比較できないのが残念である。図 C-11-5 の結果では、「自分の思うように物事をすすめたい」という母親が半数を越えている。これが多いものかどうか、比較するデータがないので定かではないが、多いような気がする。一方、子育ては母親の思うように

はいかないものである。母親の思うように子どもを支配してもらっては困るのである。早期知育教育とか、スポーツ選手や芸能関係など、親は子どもにいろいろな期待をかけて子育てをしている。子どもの人生を親の思うように操作して、子どもの人生で親の「自己実現」を図るという事例が多々見受けられる。これも「自己実現」というテーマで育ってきた現代の親ならでの現象ではないだろうか。しかし、子どもの人生を使って、親が親自身の「自己実現」を図ると、子どもの心の発達は歪む。

図 C-11-5　あなたは、自分の思い通りにものごとをすすめたい方ですか

（兵庫、2003 年）



親としての役割を果たすためには、自分のしたいことを一時的に横に置いておくことも必要である。言わば「自己犠牲」が必要なのである。そのため、子育てしている年齢の親の心の発達課題は、自分個人としての「自己実現」と「親としての役割」とのバランスをどのように取るか、ということになる。この心の発達課題に遭遇し、戸惑っているのが現代日本の親たちである。カナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”は、そのような心の発達課題を親たちが乗りこえることを支援するプログラムでもある。

本節の問題から出てくる児童虐待予防策はすでに挙げた児童虐待予防対策③「親を親として育てる親支援プログラムの広範な実施」とともに、日本社会のあり方そのものに触れるものにならざるを得ないが、

児童虐待予防対策⑯：日本人の働き方の見直し、親がいきいきと子育てができ、しかも社会参加できる社会の実現

である。

Ｃ－12　新しい子育て支援メニュー：親支援プログラムを展開しよう！
― 対人関係の脆弱性を改善する―

これまでに紹介したように、日本の子育て現場はこの２０数年の間に、我々の想像をはるかに超えて大きく変化していた。本章の最後に、児童虐待との関連でよく言われる親たちの対人関係の脆弱性について考える。そして、今後の子育て支援・次世代育成支援のあり方、特にカナダや米国では２０年来ひろく実施している親支援プログラム、について述べる。

Ｃ－12－１　経験不足による親たちの戸惑い

「大阪レポート」においても親たちの子育ての困難感は強く感じた。しかし、「兵庫レポート」が明らかにした母親が訴える子育て困難感はさらに大きくなっているように感じる。育児困難の原因として、まず第１にあげられなければならないのは、自分の子どもを生むまでに、小さな子どもに触れる機会が急激に失われつつあることである。図 C-3-2 に示したように、「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さな子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」という問に、「ない」と答える母親は５５％と半数を超えている。「自分の子どもを産んで、初めて赤ちゃんを抱く」という母親が増加しているとは 1980 年当時にも言われていたが、その傾向はますます顕著になっている。

その人にとって経験ほど大切なことはない。人は経験から学ぶのである。小さな子どもとのかかわりの経験がまったくないままに、自分の子どもを育てなければならない母親の不安と戸惑いは、５０歳代以上の世代には想像できないほど強いものであろう。よく「母性本能」という言葉が使われるが、母親だからと言って、生まれながらに子育ての方法が身についている訳では決してない。母性は育つものであり、まわりのいい環境により引き出されるものであることを「大阪レポート」は証明している。だからこそ、すでに述べた児童虐待予防策③「親を親として育てるための親支援プログラム（Nobody's Perfect など）の広汎な実践」や④「小・中・高校生や大学生など、将来親になる世代が乳幼児と触れ合う機会を意識的に作り、親になるための準備性をはぐくむこと」が必要なのである。

Ｃ－12－２　子育ては予測が立たない出来事の連続

図 C-5-1 に示した「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いがありましたか」という質問結果では、「おおいにあった」という母親が３人に１人以上であった。この質問は、想像していた子育てと現実とのギャップを聞いている。そして、想像と現実のギャップがきわめて大きいことがわかった。このことは、先に述べた経験不足とも深く関係したことである。乳幼児を知らないままに、頭で想像していた子育てと現実の子育てがあまりにも異なり、母親の精神的ストレスの原因になっているのである。

このような見方とは別に、本来子育ては予測が立たない営みであり、想像と現実に大きなギャップがあるのは当たり前のことだという見方もある。子どもは成長していく存在であり、それに従い行動も日々変化する。子育てでは親たちは予測できない事

態に常に遭遇し、対処しなければならない。ところが、現代日本では予測できないことをできるだけ避けたい、という傾向が強くある。そして、何についてもマニュアルを作成し、誰もが共通の答えを持とうとしている。１つの確かな答えが必ずあるはずだ、という前提で仕事をしている。現代日本の社会風潮は、マニュアル依存である。何か事故が起これば、マニュアルはあったのか、マニュアルどおりにしていたのか、が問われる。

しかし、子育てでは、誰にでも当てはまる答えはあり得ない。自分の子どもとぴったりあうことを書いていないことに悩んだ母親がよく「育児書は嘘ばっかりだ」と訴えるのを聞く。そして、なぜ赤ちゃんに取り扱いマニュアルが付いていないのか、と真剣に不満を訴える母親も登場している。しかし、「特定の子どもにぴったり合う育児書は書けない」のであり、そのような育児書を要求すること自体、無理な要求である。マークシート方式のテストに慣れた今の子育て真っ最中の親の場合、「答えを考えるのは私の仕事ではない」と意識的、あるいは無意識的に考えているようである。答えを考えるのは、出題者の役割であり、「私のするのは、与えられた選択肢から正しい答えを選ぶことだ」という志向が強い。しかし、子育てでは、ひとつのはっきりとした答えはない。もし、はっきりした答えを与えられても、現実にはうまくいかない。「ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西」の事務局には、「電話相談をする度に落ち込む」という訴えがよくある。電話相談をして、「正しい子育て」を教えられ、そのときはなんとなく納得するのであるが、現実にはそのとおりにはいかず、「私が悪いのか」と育児に自信がなくなり、落ち込む、という。親たちは「正しい育児」については、知っている場合も多い。しかし、その「正しい育児」ができなくて悩んでいるのである。

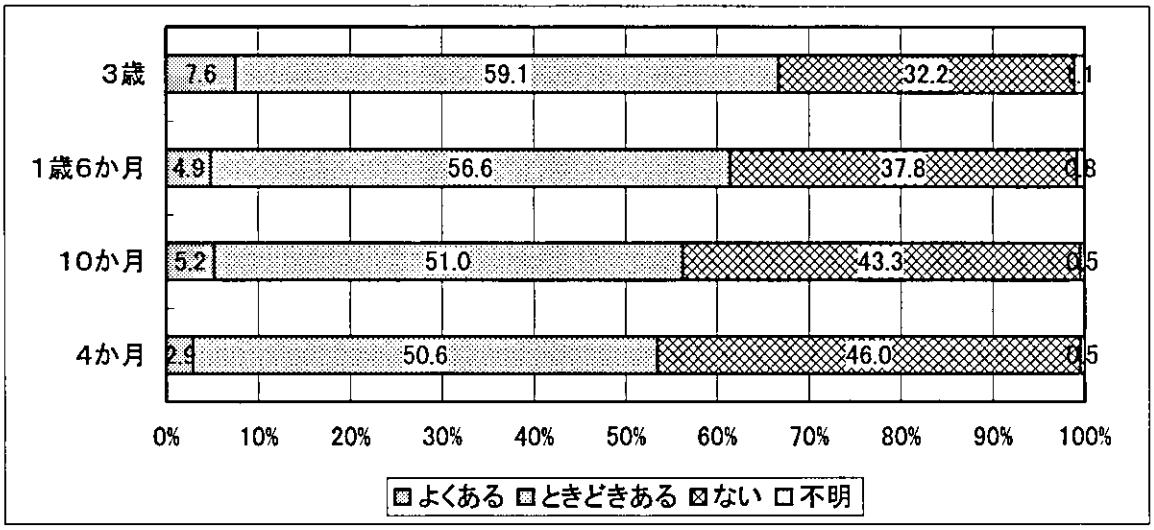
本章第 C-5 節で述べたように、「自分の子どもをもつ前にイメージしていた育児と実際の育児とでは違いがありましたか」に「おおいにあった」と答える母親は、精神的ストレスが高いことが判明している。育児においては、日々予測できない事態が起こっており、母親たちは子育てにイライラや不安を募らせている。世の中全体が予測可能性を追求している現代日本に育った親たちにとって、育児という予測できない事業に取り組むことは、想像以上に不安やイライラが募る体験なのである。

Ｃ－12－３　自信がもてないことが、ストレスの大きな原因

図 C-12-1 に「育児に自信がもてない、と感じることがありますか」という質問結果を示している。児の月齢とともに増加し、３歳児健診時点では、「よくある」７．６％、「ときどきある」５９．１％、「ない」３２．２％である。この質問は、「大阪レポート」にはない。そのため、自信がない親が増えているのか、どうかについては、一概に評価をくだすことはできない。「育児に自信がもてない母親がこんなにも多いのか」という見方もできるし、子育てのことだから「自信がもてない」と感じることは誰にでもあるだろう、という見方もできる。

一方、「育児に自信がもてない、と感じることがありますか」という質問結果と、母親の精神的安定度がきわめて強い相関関係があることが「兵庫レポート」では判明している。すなわち、育児に自信がもてない親は育児での不安感（図 C-6-6）や「イライ

図 C-12-1　育児に自信がもてない、と感じることがありますか



ラ感」(図 C-7-3) が強く、体罰も多用していることが判明している。「育児に自信が持てない」ということが、母親の精神的ストレスの大きな原因になっているのである。そのため、図 C-12-1 に示した「育児に自信がもてない」という母親たちの訴えは、そのようなことはあって当たり前だ、と軽く受け流さないで対応すべきであることを示している。

C－12－4　自信がないにもかかわらず、避けられない育児

現代の母親たちの世代は、自信がないままに何かをする、ということに慣れていない世代である。自信がなければ、それはしないで避けてきた母親たちにとって、育児は自信がなくても避けて通れない初めての体験である。そのため、一般の想像を超えて、自信がもてないことが大きな精神的ストレスの原因になっているのである。

このことから言えることは、子育て支援では“親の代わりに子育てをするという支援ではなく、親が親としての自信を持って子育てができるようになるような支援をすることが大切である”ということである。

これは、育児でのいろいろな実体験をすることによって、子どもを知り、子育てに自信をつけるということである。しかし現代日本においてむしろ大切なことは、子育ては試行錯誤であり、「これでいいのだろうか、と思い悩む」ということがむしろ自然である、という感覚が持てるように支援することが大切である。そして、一生懸命に努力している自分自身に自信がもてるように支援することである。

C－12－5　物理的だけでなく、精神的にも母親が孤立している

育児困難の大きな原因は、経験不足とともに、子育て中の母親の孤立である。「近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか」という質問の４カ月児健診での結果を「大阪レポート」と今回の調査結果を比較すると（図 C-4-1)、「１～２名もいない」という、全く孤立している母親が 1980 年の１６％から 2003 年では３５％へと２倍以上に増加している。実に３人に１人の親が孤立している。この

件については、本章第Ｃ－４節ですでに述べた。

今回の「兵庫レポート」の結果は、本章第Ｃ－４節に示したように物理的に母親が孤立している、というだけに留まっていないのが、大きな特徴である。「大阪レポート」では、「近所に話し相手」がいる母親は、いない母親よりも明らかに育児不安が少ないという結果が得られた。ところが、今回の「兵庫レポート」では、「近所の話し相手」の存在や「親子で一緒に過ごす子育て仲間」の存在は、意外なことに、母親の精神的安定に寄与していないのである。これはどういうことか、と考えると、人間関係の持ち方がきわめて表面的で、その場その場でまわりに合わすことばかりしているため、いくら話をしても母親の精神的な安定にはつながっていないのではないだろうか。ボランティア活動の中で見聞きする母親たちは、確かにそのような母親たちが多い。

これは、「いじめ」と常に背中合わせの学校生活を永年送っている間に、自然に身についてしまった自分の身を守る処世術ではないか、と考える。「とにかく目立たないように」「自分を出さず周囲に合わせる」という表面的な人とのかかわり方の中で、「競争心だけはきわめて強く、人を出し抜くことばかり考えている」という人間関係のもち方なのである。しかし、このような人とのかかわりの中では、精神的安定は得られない。むしろ、ストレスが溜まるばかりである。

これからの子育て支援では、従来のように、単に、「子育てサークルや子育てサロンをつくる」というだけでは不十分で、親と親をつなぐ、ということを意識的に取り組む必要がある。

Ｃ－12－６　対人関係の脆弱性は、親自身の責任か

児童虐待が深刻化するなかで、親の対人関係の脆弱性が取り立たされている。確かに、現代の子育て世代は対人関係の持ち方がぎこちないことは確かである。しかし、それを親たちの責任と考えるのは的はずれである。すでに述べてきたように、「いじめ」と常に背中合わせの学校生活を永年送らざるを得なかったとか、予測可能性やマニュアル化、完璧を追い求める日本社会全体の思考とか、親になるための準備がほとんどできないままに子育てをしなければならないとか、どれを取っても今の子育て世代の責任ではなく、日本社会全体の問題なのである。

受け止め方で、精神的ストレスは変わる

最近、ストレス・マネージメントという学問分野が急速に進歩している。精神的ストレスの原因である「ストレッサー」の強さによって、個人にもたらされる「ストレス反応」の大きさが決まるかと言うと、そのようなことはない。同じ環境でもストレスを感じない人もいれば、強くストレスを感じる人もいる。そのような現実を思い起こすと、「ストレッサー」の強さによって「ストレス反応」の大きさが決まる訳ではない、ということは理解できると思う。

実は、「ストレス反応」の大きさは、「ストレッサー」をどう受け止めるか、によって決まるのである。例えば、「子育てに悩んでいるのは、私だけだ」と思っている母親は強いストレスを感じる。そして、「私は母親失格ではないか」と悩んだりする。ところが、その母親が他の母親と交われるようになり、「みんな同じように悩みながら子育

てしているんだ」「私もそれなりに頑張っている」と思えるようになると、子育てのストレスはずいぶんと軽減される。「完璧にしなければ‥‥」と思い込んでいるとストレスが溜まるが、「完璧な親なんていない」と考えられるようになるとずいぶん楽になるものである。

今必要な子育て支援のひとつは、そのような母親たちの思い込みを修正するような親支援プログラムである。ＮＰＯ法人こころの子育てインターねっと関西が取り組んでいるカナダでの子育て支援プログラム“Nobody's Perfect”は、まさにそのようなことを目的にしたプログラムである。今後、保健センターや子育て支援センターなどで広く実施していくべきプログラムだと考えている。

Ｃ－１３　子育て仲間を求める母親たち
― 子育て支援・児童虐待予防の基本戦略 ―

本分担研究班のメンバーが中心的役割を担っている「ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西」（ＵＲＬ；http://www9.big.or.jp/~kokoro-i/）の前身は、1980年代後半から日本全国に自然発生的に生まれた「子育てサークル」や「子育てネットワーク」、子育て情報紙など、子育て真っ最中の母親たちの自主的なグループ子育てに、現代日本の閉塞した子育て状況を打開する“希望の灯”を感じて、設立された親と専門職とで一緒につくるボランティア団体である。平成１６年１月からＮＰＯ法人として活動している。本節では、「子育てサークル」についての調査結果を検討する。

ここで取り上げる「子育てサークル」は、「大阪レポート」では調査項目にあがっていない。というのは、「子育てサークル」というのは 1980 年代後半から日本全国に自然発生的に生まれたものだからである。「大阪レポート」の基礎となった調査を分析していた頃には「子育てサークル」についての話題はまったく出て来なかった。筆者たちがその存在に気づいたのは、1990 年代に入ってからである。「ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西」が設立された 1995 年当時は、「子育てサークル」という統一的な名称もなかった。

我々が子育て支援、特にグループ子育てへの支援活動をする中で感じていることは、専門職は子育てサークルに参加している母親たちを誤解していないか、ということである。専門職の方から、「子育てサークルに参加しているような元気な母親は支援する必要がない」とよく言われたものである。しかし、果たしてその認識は正しいのだろうか。本節では、子育て支援・次世代育成支援、児童虐待予防の基本戦略についても述べる。

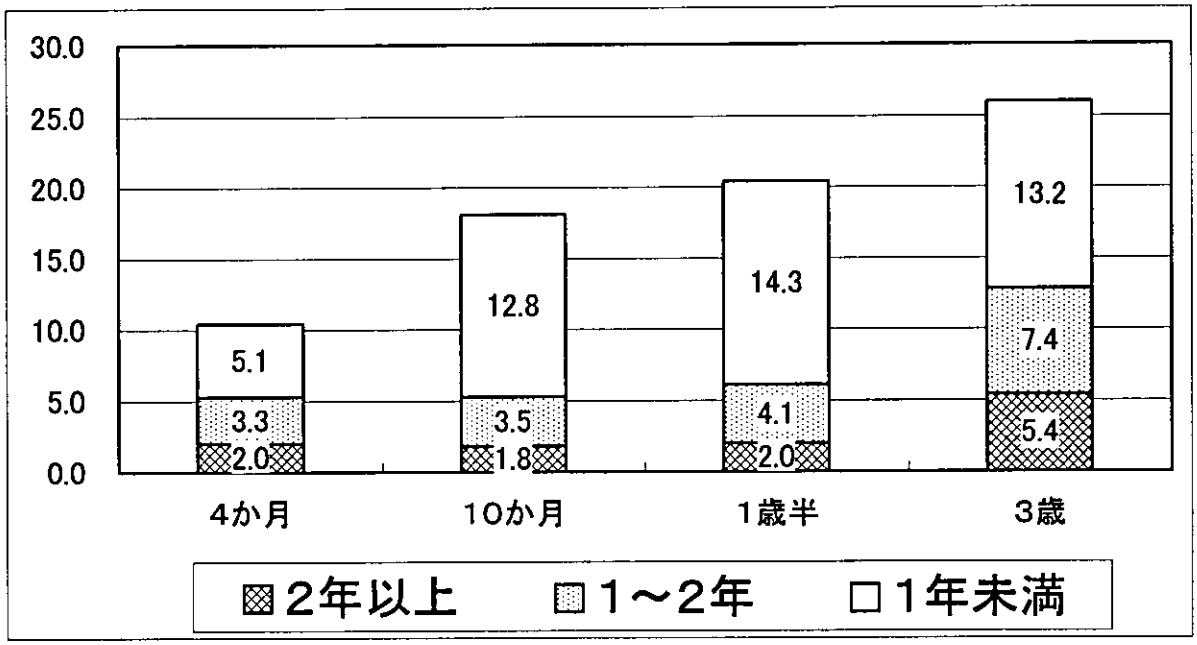
さて、これまで報告した「兵庫レポート」の結果のほとんどは、我々がまったく予測できなかったものが多かった。本節で取り上げる「子育てサークル」に関する調査結果も、まったく予測できなかったものである。

Ｃ－13－１．驚くほど多くの母親たちが「子育てサークル」に参加している

図 C-13-1 に「育児サークルに参加したことがありますか」および「育児サークルへの参加期間は？」の質問結果を示す。図 C-13-1 からわかるように、「子育てサークル」

への参加率は児の月齢とともに急速に増加し、３歳児健診の時点では２６．１％にも達している。実に、４人に１人以上の母親が子育てサークルに参加しているか、参加した経験があるという結果である。この参加率は極めて高い値である。

図 C-13-1 子育てサークルに参加したことがありますか。その期間は？（兵庫、2003 年）



「母子カプセル」という言葉が一時よく使われたことがあるが、子育てにおいて母子が孤立することは、最も避けるべきことである。「子育てサークル」の自然発生的広がりは、まさに「母子カプセル」から親子を開放するものであり、筆者たちは大いに「希望の灯」を感じたものである。そして、この 10 年間、「子育てサークル」や「子育てネットワーク」などの「グループ子育て」を支え、広げることを主な目的に活動してきた。そのため、常に「子育てサークル」に関心を寄せて、「子育てサークル」の調査もこれまで３度実施してきた。[7～9] しかし、それらの調査は個々のサークルの活動状況やニーズ、抱えている課題などの調査であり、今回のような姫路市というある地域全体で、何パーセントの母親が子育てサークルに参加しているのか、という調査をしたのは初めてである。そして、こんなにたくさんの母親たちがサークルに参加していることに、ほんとうに驚くとともに、また新たな「希望の灯」を見る思いがしている。というのは、子育て仲間を求めるというのは極めて健康な志向であるからである。

Ｃ－13－２．この１０数年間の「子育てサークル」の変貌

ところで、子育て支援・児童虐待予防にかかわっている専門職や行政担当者の方々の「子育てサークル」に対するイメージは、どのようなものであろうか。もともと「子育てサークル」はどのようなニーズで生まれたのか、について聞き取り調査をすると、「子どもを集団の中で遊ばせたい、自然の中で遊ばせたい」という母親の願いから生まれたということがわかった。子育てサークルが自然発生的に生まれたひとつの大き

な理由は、ついこの間まで、公立幼稚園が１年間だけしか子どもの保育をしていなかったことである。だから、1990年代の後半までの子育てサークルに集まる子どもたちの年齢は３～４歳ぐらいが主体で、集団遊びができる年齢の子どもたちとその親たちが集まっていたのである。

ところが、筆者たちがボランティア団体『こころの子育てインターねっと関西』を立ち上げた頃（1995年）から、妊婦さんや０歳の赤ちゃんを持った母親から、「サークルはありませんか」という電話がかかってくるようになっていた。一緒に活動していた母親リーダーたちが、「サークルといっても、まだ子どもは遊べないのに‥‥？」と、不思議がっていたことを思い出す。

妊婦さんや赤ちゃんを育てている母親からのサークルに関する問い合わせは、「私の子育て仲間がほしい」という要求から出てきたもので、とても健康な欲求である。「私は子どもについてよく知らない。どうかかわってよいのか分からない」ということを自覚し、他のお母さんたちはどうしているのか、「話をしたい」という要求がたくさん出てきたのである。これはとても健康な欲求である。

ところが、少子化が進む中で３～４歳の子どもたちは保育園や幼稚園に取り込まれてしまった。そのため、ほとんどの子育てサークルは０・１・２歳の子どもの親が中心になっている。図C-13-1からも、子どもがまだ０・１・２歳からサークルに参加していることがわかる。しかし、集まる子どもの年齢が変わると、子育てサークルの中身は変わらざるを得ない。３～４歳ぐらいが主体だった頃は、子どもの集団遊びが可能であった。しかし、０・１・２歳の子どもでは、まだ子どもどうし遊ぶというところまでは発達していない。当然「子育てサークル」の活動の中身は母親主体のものに変わらざるを得ない。

以前も今も「子育てサークル」というように同じ名前で呼ばれているが、「子育てサークル」の中身は、ここ10年間に大きく変わってしまったのである。そのことをしっかりと認識する必要がある。

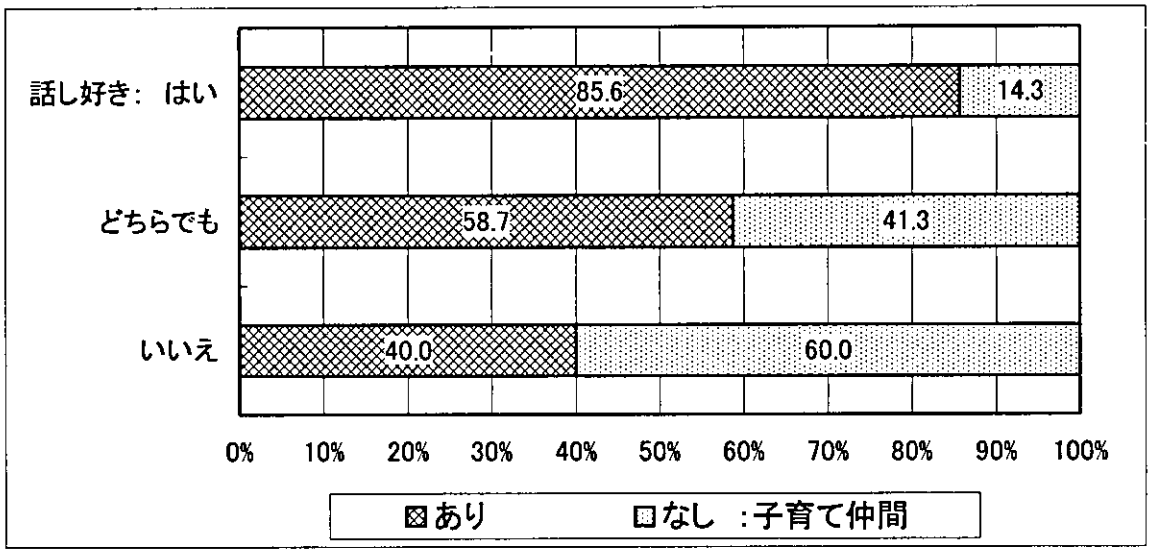
Ｃ－13－３　「子育てサークルに参加するような元気なお母さんなんか、支援の必要はない！」は当っているか

ところでどんな母親が「子育てサークル」に参加しているのであろうか。ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西では、「子育てサークル」や「子育てネットワーク」などの「グループ子育て」を支援している。ところが、立ち上げた当時から、保健師などの専門職からは、「私たちはもっと深刻なケースを抱えている。そんなサークルに参加するような元気なお母さんなんか、支援の必要はない！」という批判をよくされてきた。しかし、この調査結果では、子育てサークルに参加している母親は、専門職が想像するような元気な母親ではないことが判明しているのである。

今回の調査では、「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのが好きですか」という質問をしている。この質問に「はい」と答える母親は、「近所でふだん世間話をしたり、子ども（赤ちゃん）の話をする人」が「いる」母親が多く、また図C-10-2に示すように「親子で一緒に過ごす子育て仲間」が「いる」母親が多いという結果が出ている。「おしゃべり」が好きで社交的な親は、自分で子育て仲間を見つけているこ

とがわかる。それはそれでいいのであり、本来の姿であるとも言える。しかし、図 C-10-2 からわかるように、そのような母親でも１４．３％（７人に１人）は、少子化の中で子育て仲間が見つけられない親もいるのである。一方、後で触れるが、「母親が集まればいい」というものでも当然ない。集まるとそこが子育て競争の場になることも十分考えられるからである。

図C－13－2 「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのは好きですか」と「親子で一緒に過ごす子育て仲間はいますか」とのクロス集計（1次調査）



さて、子育てサークルにはどのような母親が集まっているのであろうか。一般には「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのが好き」な母親たちが「子育てサークル」に多く参加しているのではないか、と想像されていると思う。ところが、調査結果ではそうはなっていないのである。図 C-13-3 に「育児サークルに参加したことがありますか」と「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのが好きですか」とのクロス集計結果を示す。図 C-13-3 をみると、話好きな母親の方が少しサークル経験が多いように見えるが、統計的には多いとは言えず、これら２つの質問の間には相関関係はない。言い換えると、子育てサークルに参加している母親はごく普通の一般的な母親で、「おしゃべり」が好きではない母親も多く参加しているのである。「おしゃべりが好きではない」「人づきあいが得意ではない」と自覚している母親が参加していることが、何よりも重要なことである。

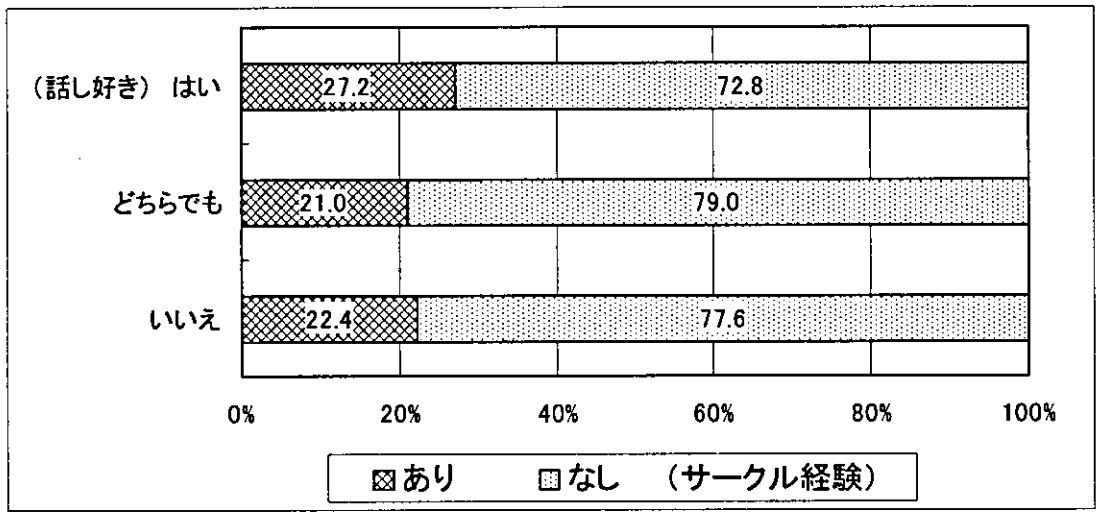
ところで、「人づきあいが得意ではない」という母親たちがなぜ、「子育てサークル」には参加できるのであろうか。それは、「子育てサークル」が、人づきあいが得意ではない」という人も気軽に参加できる何か仕組みを持っているということである。もう２０年も前になると思うが、「小学生が学校で遊ぶ約束をしていないと、帰宅後友だちの家に遊びに行けない」ということが話題になったことである。「子育てサークル」も同じではないかと考える。すなわち、「子育てサークル」は場所と時間が決まっているため、すなわち約束ができているため、「人づきあいが得意ではない」という母親も参加しやすいのである。

ここから出てくる児童虐待予防策は、

児童虐待予防対策⑯：子育てサークルやつどいの広場・子育てサロンをあらたにつくること、そして親自身が主体的に運営できるように支援すること

である。

図 C-13-3「育児や家庭のことについて、他の人とおしゃべりするのが好きですか」とサークル経験の有無とのクロス



C－13－4.「子育てサークル」への参加のメリットは？

「子育てサークルへの参加はどのような点でよかった」と母親たちは考えているのであろうか。図 C-13-4 には３歳児健診での「子育て仲間ができて、特に感じることを３つまで○をつけてください」と「子育てサークルに参加して、特に感じることを３つまで○をつけてください」という質問での、項目ごとに○のついた率を示している。図 C-13-4 からわかるように、２つの質問の結果は類似していて、「子どもの遊び友だちができた」「子育て情報が得やすくなった」「子どもへのかかわり方の参考になった」「母親の友だちができた」の４項目が５０％前後を占めている。

特に「子育てサークル」を長く経験している母親の特徴として、「子どもを外で遊ばせる」母親が多いこと、「母親の友だち」「子どもの友だち」が多いことがわかっているが、子育てにおける「イライラ感」や育児不安、負担感などの精神的ストレスの軽減にはそれほど目立った効果はあらわれていないことも判明している。これらの結果からも児童虐待予防策としてすでに述べた

児童虐待予防策⑧「親どうしのグループ子育ての推進」、

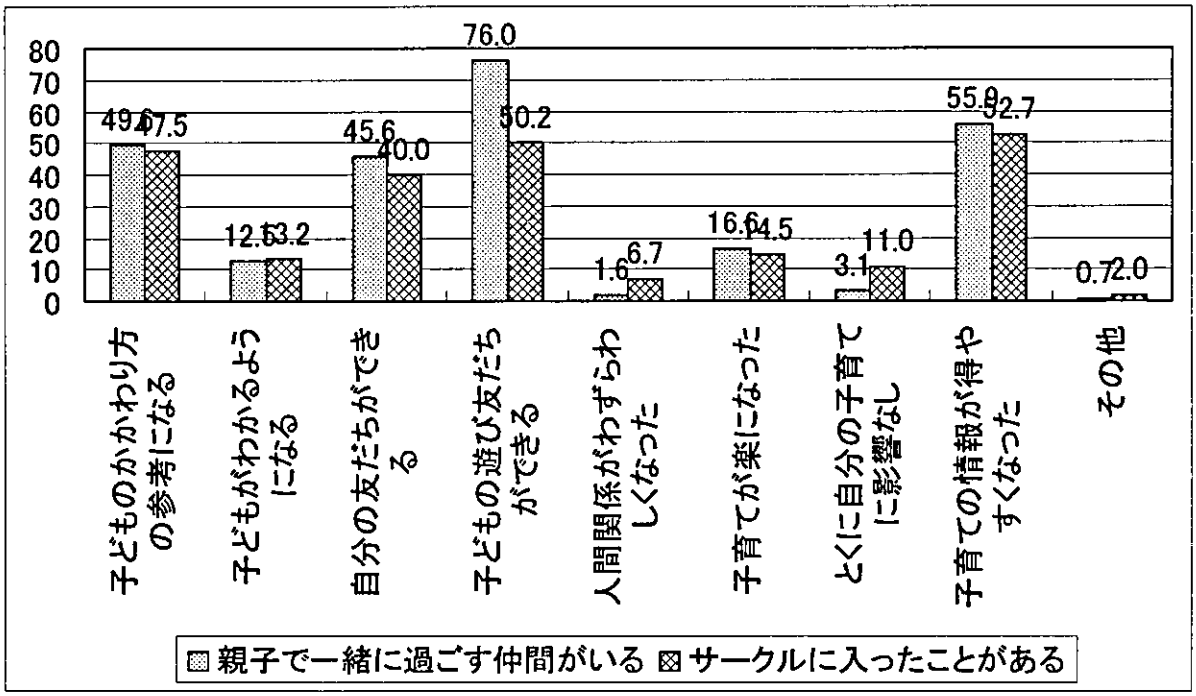
児童虐待予防策⑨「親と親を積極的につなぐコーディーターの育成」、

児童虐待予防策⑮「子育てサークルやつどいの広場・子育てサロンをあらたにつくること、そして親　自身が主体的に運営できるように支援すること」

児童虐待予防策⑯「子育てサークルやつどいの広場、子育てサロンなどが、親の仲間

づくりをコォー　ディネートできるように機能アップを図ること」
などが浮かび上がってきたのである。

図 C-13-4 子育て仲間ができて、あるいは「子育てサークル」に入って、特に感じることは？
（3つまでの複数回答、兵庫、3歳児健診）



C－13－5　子育て支援、次世代育成支援、児童虐待予防の基本戦略
― 親を運転席に！支援職は助手席に！ ―

表 C-13-1 に「子育て支援の基本戦略」を示す。これは本分担研究班の原田正文が著書『子育て支援とＮＰＯ』[10] の中で提起したものである。基本戦略の考え方は、“大多数の親子への支援は、市民主体の「子育てネットワーク」を軸にして、グループ子育てを広げることにより進める。行政や公的機関は個々の親にではなく、「子育てネットワーク」や「子育てサークル」への支援を通して子育て支援の全地域への浸透をはかる。そして、現実に児童虐待がおこっているような困難事例については、専門職が前面に立って積極的にかかわる、というものである。

「３歳児健診時点で、４人に１人の母親が子育てサークルに参加したことがあり、しかも参加している母親はごく普通の母親である」という「兵庫レポート」の調査結果は、今後グループ子育てを軸にして子育て支援を進めていくことの妥当性を示している。支援の方法次第では、子育てサークルは今後とも広がると考えられる。問題は、子育てサークルの質をどう確保するか、である。特にここ 10 年ほどは、子育てサークルは子どもの年齢が小さいので、子どもを遊ばせるというよりは“母親の仲間づくり”が主体になっている。しかし、親どうしをつなげる、というノウハウは親たちにはないと思われる。また、日本のどの専門職にもない専門性である。

表 C-12-2 に「グループ子育てのメリット」[10] をあげているが、子育てサークルが表 C-12-2 にあげたような「グループ子育てのメリット」を真に実現するような機能を備えるためには、ファシリテーターが必要ではないか、と筆者たちは考えている。

ＮＰＯ法人　こころの子育てインターねっと関西では、2003 年４月より、カナダの親支援プログラム“Nobody's Perfect”を取り入れて、日本での普及活動に取り組んでいる。（資格認定機関 Nobody's Perfect Japan ＵＲＬ：http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/ 参照）。“Nobody's Perfect”プログラムそのものは、表 C-13-3 に示すとおり、資格のあるファシリテーターがプログラムをすすめるものであり、対象は０歳～５歳の子どもを育てている親、人数は 20 人を越えない少人数、10 人くらいが適当、週１回、６～10 回連続、子どもには一時保育をつけ、親子分離で行う参加型のグループワークである。しかし、トレーニングされたファシリテーターが１～２か月に１度、子育てサークルに加わり、“Nobody's Perfect”のような親たちの話し合いをファシリテートすると、そのサークルの質は格段に高まることは実証されている。そのような子育てサークル支援が今求められているのではないだろうか。

表 C-13-1　子育て支援の基本戦略（ストラテジー）
― 親を運転席に！支援職は助手席に！ ―

（１）大多数の親子への支援は、市民主体の「子育てネットワーク」を軸にして、グループ子育てを広げることにより進める。行政や公的機関は「子育てネットワーク」を直接支援することにより、子育て支援の全地域への浸透をはかる
　①グループ子育ての場に参加できる親の層は、できるだけそこで支援していく
　②親子の出会いの場を増やし、ひとりぼっちの親をなくす取り組みを進める
　③「子育てサークル」などが、グループ子育ての場としての本来の機能が発揮できるように支援する。特に、「子育てサークル」のリーダーを支える
　④市民主体に、学習を組織していく
（２）困難事例には、専門職が前面に立って積極的にかかわる
（３）地域全体を視野に入れた「子育て支援ネットワーク」を各市区町村につくる
（４）時代に見合った新しい園・学校づくりを進める
（５）次世代の親育てに、学齢期からしっかりと取り組む
（６）「子育てをする人生を選んで、良かった！」と言えるまちづくりを進める
上記（１）と（２）がストラテジーの基本的志向である。（３）～（６）も（１）の「子育てネットワーク」の育成支援を軸にして展開するものである

ここから出てくる児童虐待予防策は

児童虐待予防対策⑱：子育てサークルやつどいの広場、子育てサロンなどが、親の仲間づくりをコォーディネートできるように機能アップを図ること

である。

表 C-13-2　グループ子育ての六つの「目的とメリット」

①イキイキと遊べる仲間と空間、時間を子どもに保証できる
②母親の仲間づくりができ、育児不安が解消できる
③いろいろな親子をみることにより、子どもとのかかわり方が自然に学べる
④親子ともどもに対人関係のトレーニングができる。特に社会性が育つ
⑤子育てなどについての“学習の場”がつくれる
⑥親同士のつながりが生まれることにより、いじめや非行などに対する地域の問題解決能力が高まる

Ｃ－13－６　公的子育て支援が真に機能するための１５のチェック・ポイント
—市民活動と公的支援との連携のために —

分担研究者は、この１０年間、子育て支援のボランティア活動を行ってきた。この間、市民活動と公的子育て支援の関係についてずいぶん考えさせられた。公的機関が地域の状況を把握しないままにつくった子育てサークルのために、親たちが 10 数年来自主的に運営してきた子育てサークルが消滅していくという現状を見たり、親たちがつくりあげた子育てサロンという取り組みを、行政がすぐに真似して、市民のつくったサロンがなりゆかなくなるという現状を見たりして、公的子育て支援に対して不信感を募らせた時期もあった。

しかし、最近は市民活動と公的機関の役割とをかなり分けて考えるようにしている。

表 C-13-3　Nobody's Perfect プログラム規定

（Nobody's Perfect Japan の規約より）

１．ＮＰプログラムの社会的評価を確保するため、「Nobody's Perfect プログラム」と称して親支援プログラムを実施する際には以下の条件を満たさなければならない。この条件に満たないものは「Nobody's Perfect プログラム」と称してはならない。

（１）　認定資格のある Nobody's Perfect ファシリテーター（Nobody's Perfect Japan 認定ファシリテーター）が実施すること。ただし、Nobody's Perfect ファシリテーター養成講座修了者が、資格認定のために実施する場合は例外とする。また、全回を通し、同じファシリテーターが担当することを原則とする。

（２）１回約２時間のセッションを、原則として週１回、連続して６回以上開催すること。

（３）対象は、就学前の乳幼児の親であること。

（４）保育つきとし、親だけのグループでの実施を原則とすること。

（５）２０人を越えない少人数で実施すること。

２．ＮＰプログラムは予防的プログラムであり、専門的な個別対応を必要とする危機的状況や深刻な問題をかかえる家族を対象にしたプログラムではない。

生活に密着したニーズをいち早くキャッチして、具体的に取り組むことは行政にはできない市民活動ならではのものと考えている。そして、行政はその中で効果的なものを取り上げ、日本全体に広げていく役割、と割り切って考えるようにしている。行政が取り入れて広げていく際に、その取り組みの質を確保していくことは、本来公的機関が自分で担うべきことである。しかし、市民活動と行政が連携しない限り、それも無理のようである。そのため、公的子育て支援の質を高めていく仕事にも市民活動が一役を担う必要があると最近では考えている。

表 C-13-4 に公的子育て支援が本当に機能するための 15 のチェック・ポイントを示している。公的子育て支援が親主体の市民活動や親自身のセルフヘルプ・グループの活動の妨げにならないように、公的機関や専門職が留意すべきことを列挙している。

子育て支援は、市民活動や親自身の主体的取り組みなしには成功しないものである。この 10 年間、国を挙げて少子化対策、子育て支援、児童虐待防止などの施策を進めてきたが期待どおりの成果は上がっていない。そればかりか、子育て現場の状況はますます悪化しており、少子化の進行も停まる気配がない。何よりも、1980 年後半から自然発生的に広がってきた親主体の「子育てサークル」や「子育てネットワーク」などの取り組みは衰退の一途をたどっている。公的子育て支援が真に実効をあげるためには、表 C-13-4 の 15 のチェック・ポイントに従いこれまでの事業を再評価する必要がある。そして、表 C-13-1 の「子育て支援の基本戦略（ストラテジー）」に示した「親を運転席に！　支援職は助手席に！」という姿勢を徹底すべきではないだろうか。